

「あなたの罪はゆるされた」

—マタイによる福音書講解説教 42—

詩篇 第139篇 1節～6節
マタイによる福音書 第9章 1節～8節

説教 岡村 恒牧師

「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」(2節)。この家には、主イエスの言葉だけが響きました。

主イエスは、嵐を静め、悪霊につかれた人を解放してから、ご自分の町、カペナウムに帰ってきました。うわさを聞いて集まった大勢の人の中に、人々に運ばれてきた中風の人がいきました。主イエスはこの日、律法学者たちだけでなく、そこに集まった大勢の人々の心の声を聞き取っておられます。嵐の海で、「このかたはどういう人なのだろう」と思い巡らしていた弟子たちと同じように、人々は主イエスがいったいどなたなのか、という問いを抱えていたのです。

ユダヤ人にとって最大の関心事は《罪のゆるし》でした。神との関係がどうなっているか、という話です。神に赦され、神との関係が回復するように、必要な時には犠牲を捧げて赦していただくことが大切なことでした。神との関係回復についての専門家は、律法学者であり、ユダヤ教の祭司たちでした。神の律法について教え、人々と神との関係を繋ぎ直す権威を持っていた人々です。当時、神との関係が壊れていることの結果が、肉体の病気であり、悪霊につかれたとしか説明のつかない状態だと考えられていました。ところが主イエスがおいでになると、病人が元気になり、悪霊につかれて墓場を住み家にしていた人が解放されました。

この日、人々が中風の人を運んできました。主イエスの前に運びさえしたら癒される、と信じたのです。主イエスはこの人々の信仰をご覧になって、「子よ、…あなたの罪はゆるされたのだ」と宣言なさいました。律法学者たちはすぐに心の中でつぶやきました。人の罪を赦すことができるのはこの人ではない、と信じていたからです。祭司が祭壇で犠牲を捧げなければ、神との関係回復など実現するはずがないのです。

主イエスは、この心の声を聞き取られました。罪のゆるしを宣言することは、〈言うだけ〉なら簡単なことです。その結果を目で見て確認することができないからです。これまで律法学者たちは、犠牲を捧げた人に繰り返し罪のゆるしを宣言してきました。ところが主イエスは、ただ〈言うだけ〉ではなく、確かに罪のゆるしを実現されました。わざわざ解説を加えて、罪のゆるしの具体的な証拠をお見せになったのです。

主イエスはこれまで、言葉で、あるいは手で

触れて、また遠くから病気をいやし、悪霊を追い出してこられました。しかしこの日、主イエスはわざわざ最初に罪のゆるしを宣言し、そして説明を加えてから、神の力をお見せになりました。主イエスがいったいどなたであり、どんな力を持っておられるお方を、私たちがひとり残らず知るようになるためです。

「しっかりしなさい」という言葉を、主イエスは繰り返し口にされました。湖の上を歩いて弟子たちに近づいて来られた時(マタイによる福音書 第14章27節)や、復活して弟子たちのところにおいでになった時(同 第28章5節)、恐怖に震える弟子たちに向かって、〈私だ、しっかりしなさい〉と言われました。いずれも、主イエスがそこにおられることを宣言し、神の力をお示しになった場面です。主イエスは、ご自分がどういうお方であるかを、繰り返しはっきりお見せ下さいます。主イエスは、私たちの罪を赦して神との関係を回復し、死んで滅びる者を神の子とし、生きる者として下さるお方です。私たちは誰もが、中風の人と同じように、主イエスの前に運ばれてきて、主イエスに出会います。そこで主イエスから罪の赦しを宣告されます。〈私だ。私がここにいる。しっかりしなさい。〉と語りかけられ、罪を赦されて生きるのです。

この世の終わりに、救い主がおいでになると、病人がいやされ、歩くことのできなかった人が踊り上がり、見えなかった人が見えるようになると聖書に約束されています。主イエスがおいでになった時、たしかにこの通りのことが起こりました。私たちの救いの日が来たのです。

主イエスに出会うことさえできれば私たちの人生は完結します。もう、何一つ欠けたものはありません。罪の赦しを宣言され、永遠の命を持つ者には、もう何も恐れるものはありません。

ですから、主イエスの前に運ばれてきた中風の人の姿に、私たちは自分自身を発見します。自分の足で立ち、この世に平和を実現することも、自分自身の人生をしっかりと支えることもできない私たちを、主イエスをご覧になって憐れみ、罪の赦しを宣言して下さるのです。今ここで、この私にも、主イエスは同じ言葉を語って下さいます。「あなたの罪はゆるされたのだ」と。だからこの場所から、私たちも床を取り上げて立ち上がり、歩み出すのです。

(記 岡村 恒)